

2014年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 社会学部・教授・對馬 路人

研究課題： 世俗的宗教コーディネータの台頭と現代日本における宗教の組織化の変容

研究期間： 2014年4月1日～2015年3月31日

研究成果概要

「世俗的宗教コーディネータ」とは、宗教（聖なるもの）と人々の間を媒介する世俗的なエージェントを指している。日本の近現代の宗教変容を分析する際、これまで国家の宗教政策や宗教法制の変化や、都市化、核家族化、情報化など日本社会の社会変動との関連にしばしば言及されてきた。そして特に伝統宗教との関連では社会移動による大量の「宗教浮動人口」の発生、神社信仰の「脱地域化」、宗教の「消費化」など、在来の「檀家制度」や「氏子組織」といった人々と宗教を結ぶ在来の絆の弱化や、宗教性の希薄化の側面が特に強調されてきた。しかしそうした診断は宗教エージェントの視点に偏った事態の把握であって、いわば事態の半面をとらえているにすぎないと思われる。人々と宗教をつなぐ在来の絆の弱まりと並行して、他方でそれらの関係を結びなおす新たな絆が生成されてきたという側面に十分に目配りがなされてこなかったからである。私が「世俗的宗教コーディネータ」と呼ぶエージェントは、在来宗教と人々のつながりを結びなおすそうした媒介役のことを指している。そうしたエージェントがこれまで宗教社会学で注目されてこなかったのは、その「世俗的」な性格によるものと思われるが、人々の宗教性を（在来）宗教に結びなおす宗教の組織化の新たな有力な担い手として決して無視できない存在である。

さて「世俗的宗教コーディネータ」はどのような活動領域に進出しているのだろうか。それについて、すでに社寺参詣や巡礼など聖地へのアクセスにかかわる領域（聖地アクセス系）、冠婚葬祭など人生儀礼にかかわる領域（人生イベント系）、種々の人生問題の相談や精神的修行に関する情報提供に関する領域（宗教情報提供系）などを挙げた。また、第一のものについては交通関係のエージェントや旅行代理店、二番目については葬儀社、墓園業者、式場運営会社など、また第三の領域では出版関係やコンベンション企画のエージェントなどの参入を指摘した。そして、特に第一の領域に関して、関西の私鉄が聖地へ人々を誘う参詣鉄道としてとしての性格を色濃く持っていたことを論じた（「参詣鉄道としての関西私鉄」、山中弘編『宗教とツーリズム』世界思想社、2013 初収）。

これらを踏まえて、今回の研究では、現代の宗教的ツーリズムの展開として関心を集めつつあるいわゆるスピリチュアル系のツーリズムや、スピリチュアル系イベントとして近年活発化しているスピリチュアル・コンベンションを取り上げ、どのようなエージェントが、どのように人々と「宗教的なるもの」の間を媒介し、いかに人々の宗教性を組織化しているのかについて調査研究を行った。

スピリチュアル系のツーリズムについては、それらが比較的盛んである沖縄やバリ島で

のフィールド調査を実施した。沖縄には御嶽（ウタキ）と呼ばれる聖地が各地にあり、ユタと呼ばれるシャーマンの霊能者や地元住民の礼拝の対象となってきたが、近年「癒しの島」としてクローズアップされるに従い、本土の旅行者がそれらを訪れるケースが増えてきている。そうした動きを反映して観光開発の観点から、それらを積極的に取り込む動きも活発化している。そうした一例としてテーマパーク「琉球王国村」を展開しているエージェンツが実施している「ガンガラーの谷」ツアーに注目した。「ガンガラーの谷」は「琉球王国村」に隣接して設置されているツアーコースで、ガイドの案内で、自然の洞窟を利用したカフェ、古くから信仰を集めてきた子授けの御嶽、ガジュマルの大樹を中心とする自然林、原始人の生活遺跡などを巡る比較的コアなビジター向けのツアーで、「太古のパワースポット」、「生命の神秘に触れる」などのキャッチフレーズで「スピリチュアル」好きのツーリストの人気を集めている。ここには伝統的な聖性と現代的な「スピリチュアル」を巧みに編集し、パッケージ化して提供する観光エージェンツのコーディネートが窺える。

スピリチュアル系コンベンションについては、聖なる情報のコーディネーションの展開という文脈で調査・分析を進めた。スピリチュアル系コンベンションは2000年代以降のスピリチュアルブームの中から生まれた動きである。しかしこのスピリチュアルブームはこの時期に突然起こったものではなく、1970年代終盤から活性化してきた「精神世界」ブームを継承したものである。そしてこの「精神世界」ブームは、「精神世界の本」と題したブックフェアの開催（紀伊国屋書店）を契機に火がつき、全国の書店に「精神世界の本」コーナーが常設されるようになるといった形で展開していったという特徴を持つ。宗教、霊性の探求、瞑想、セラピー、心の修行、自己啓発など精神性、霊性の追求に関する様々なジャンルに関する書物が広く集められ、書店という場でそれらに関する情報のパノラマ的な展示がなされるようになったのである。また、「精神世界」の諸ジャンルを総論的に紹介するガイドブックや「精神世界の本」をカタログ的に集約した書物（代表的なものとしてブッククラブ回の手で毎年内容を更新して刊行された『精神世界の本』を挙げることができる。90年代の終わりの頃の版では、おおよそ一万点の書物がリストアップされている。なお、この書物は2000年代に入って、『スピリチュアルデータブック』と改称して刊行されている。）も数多く刊行された。このように「指針世界」ブームは、何より「精神世界の本」ブームとして、つまり書店や出版会社によるそれに関する情報編集、情報集約を通して広がっていったと言えよう。そうした意味でこの時代は書店・出版社による「宗教情報ブーム」（井上順孝）であったといえるかもしれない。

さて、スピリチュアル系コンベンションは2000年代のスピリチュアルブームの中、「すびこん」の名称で開催された。見本市会場にスピリチュアルを実践している、あるいはスピリチュアルなサービス。グッズを提供している個人や団体が多数出店し、入場者はそれらを自由に見学でき、気に入った店ではサービスを受け、グッズを購入できる、そうしたスタイルのイベントである。当初大都市圏を中心に開催されたが、主催団体の数も増え、

大小様々なスピリチュアル系の催し、全国各地で展開されるようになっている。こうしたコンベンションスタイルのイベントは、「精神世界」の時代にブックフェアの形でいわば二次元的に行われた情報編集、情報集約を三次元化する試みと見ることができる。それまで書店の書架に並べられた「精神世界」・スピリチュアルに関する書物を次々拾い読みし、あるいはそれらに関するカタログ本に目を通しながら行ってきた情報収集が、今や見本市会場に出かけ、そこに並んだブースを直接品定めしながら行うことができるようになったからである。

昨年度の研究では、現代日本では人々と「宗教的なるもの」との出会いやかかわりがますます世俗的なエージェントによる様々な仕掛けによって媒介され、方向付けられるようになっているという観点から、スピリチュアル系ツーリズムやスピリチュアル系コンベンションといった事例を通して、その具体的な展開や様相、それらがもたらす人々の「宗教的なるもの」へのアクセスやかかわりへの影響などを明らかにすることを試みた。